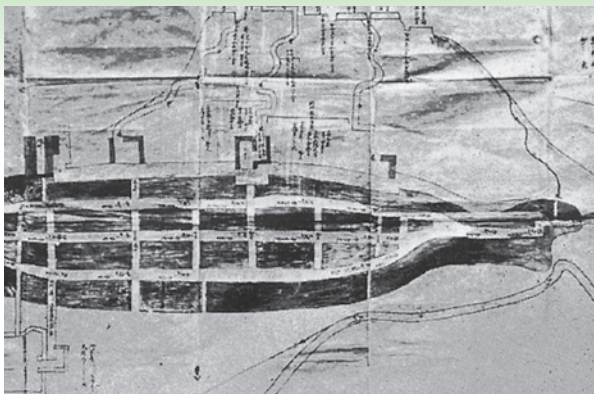


甲賀市の文化財²³

水口岡山城の時代(Ⅱ)



▲水口古図(旧幕府京都大工頭「中井家文書」より)

天正13年(1585)、甲賀武士の改易の後、甲賀支配のシンボルとして築かれた城が「水口岡山城」です。豊臣秀吉政権下に甲賀町滝出身の中村一氏が初代城主に命じられ、築城したと伝えられています。

『近江輿地志略』によれば、本丸をはじめ四つの郭からなり、西麓から本丸に至る「大手」と東麓から本丸に通ずる「搦手」の道があったと記録されています。こうした岡山城の姿は、近世の絵図の中にも登場します。その中でも、水口岡山城の様子を詳しくうかがい知る絵図は、京都大工頭中井家に伝わる史料「水口古図」の中に見えます。

そこには、岡山城の本丸の内部に「天守」の建物があり、その規模を記しています。さらに、岡山城の山麓に柵型状の虎口が3箇所設けられ、天守に至る3本の道が描かれています。

また築城にあたっては、三雲城や大溝城などの古材が使われたと伝えられ、大溝城からの搬出状況は、「西川文書」(『蒲生郡志』所収)によって知ることが出来ます。

豊臣秀吉の家臣長野正勝が監督を勤め、西川宗兵衛



▲水口岡山城出土瓦

と間宮與左衛門等を奉行として大溝城の解体が行われ、水口岡山城への移築が進められます。

運搬経路は、大溝城から琵琶湖を舟で運び、巨材は野洲の江頭を経由し、野洲川を利用して水口へと運ばれたものと考えられます。また、小材や瓦類は各地の人夫を徴発して近江八幡の船木より水口の下山まで陸路で運ばれたことが記録されています。

郡域を越えて、これまでにない規模で推し進められた水口岡山城の築城とそこに秘められた数々のエピソード。

中村一氏が精力を注ぎ込んだ水口岡山城とその城下町には今も大原町、滝町、池田町などの町名が見られ、かつて中村一氏が甲賀町滝周辺の村々から住民を移住させたその名残を伝えています。

甲賀の主邑「水口」で大きな都市計画が進められ、近世東海道水口宿の繁栄の礎を築いてゆくのです。

問い合わせ
歴史文化財課
TEL 86-8026
FAX 86-8216

4月に亀山市を震源に発生した地震は、甲賀市にも緊張を走らせました。幕末の安政元年には、やはり伊賀・伊勢地域を中心とした大地震があり、甲賀郡にも大きな被害が出たことが記録されており、他人事ではすまされません。甲賀市は豊かな自然に恵まれています、一方で地震や風水害は自然の厳しさを改めて警告します。

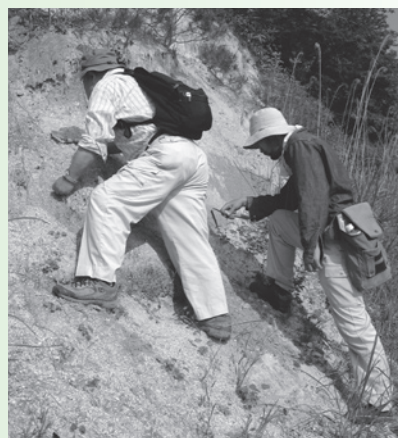
現在の琵琶湖の数倍あったという「古琵琶湖」が残してくれた良質の陶土は信楽焼を生み出しましたが、一方でそこに堆積した重粘土質の土壌は、農作業に大きな労苦を与えました。自然と私達の暮らしは良くも悪くも強い結びつきのなかにありましたが、最近はその事実を忘れがちです。

甲賀市史第1巻は原始・古代を対象としていますが、まずは長く豊かな歴史が刻まれた市域の自然、とくに大地をつくる地質に目を向けます。山地をつくる中・古生層の固い岩、火山のマグマによってつくられた花こう岩類、暖かい海の貝の化石が出る鮎河

市史の小径

第20回

足もとの自然をみつめる



▼フィールドに地層を探る

層群、そして柚川や野洲川で次々と見つかったゾウの足跡化石で知られる古琵琶湖層群など、甲賀市の特徴的な地質を中心に紹介しながら、自然と私たちの暮らしの接点をさぐります。まず足下から見つめ直す。甲賀の歴史の第一歩です。

問い合わせ 歴史文化財課 市史編さん室
TEL 86-8075 FAX 86-8216